



源
 氏
 家
 傳
 卷
 之
 一
 上



源氏家傳卷之
 一

中村俊定文庫
 文庫 18
 270



物かより里の山々へ 酒肴を之
十之回とたぬ学もよ指を屋
と後ハ四遊多く白鳥客と集て
殊き處ハ穉なり然る小具芳名
と中ばくく懐念の發句と饋ふ
人殆先集子倍あは是知て人

生かす小就友は厚く乃小志深む
流澤やう梨志のりといへ中も晩秋
あつしやうを縁以て織る
好く人を厚情の句く夏目よむ
去る好風は吹きて世なり永く
はるかなもあつしやうといへ

輪坊のち向ふところを本句
とらへて一集は題して十三知と
いぬるし志のちま

寛保二年八月
浪元
布門云



歌仙



おしづけのこもる名ハ何と雲の月 子のおしづけのこもる名ハ何と雲の月 執筆	風小半のこもる名ハ何と雲の月 可教	山峰琴乃乃流き名ハ何と雲の月 里川	雲れあつり振るるふ 鐘 巴水	鶯新也十三紅乃美の帯 晚鈴
--	----------------------	----------------------	----------------------	------------------

カハ^ウあて中や乱ん川^一錦^一
藤原氏の悔^テもくふ^テ滝
法^ニ者^ノ一^ニ笠^ノ反^テ古^ハ在^ルの^行き
ぢん^ハ回^リ弾^キても^志疎^キに^聲色
雪^ニ此^ノは^打渡^リく^ま石^乃音
流^ル志^多く^あり^ま曲^持
流^ルと^溜を^蹴た^し走^不供
級^どう^の後^ぞか^る協^乃子
教 川 水 井 鈴 教 川 水

郭^ニ月^小守^法繪^具の^四鈴
明日の^眠を^宵に^清音
翼^ゆう^くふ^かく^折て^片折^戸
岩^ノに^躰獨^の恨^を吟^氏
流^石と^山の^間の^とれ^ま抑^し
箱^をく^りて^と糸^を正^しま^す
黄^昏の^暎を^糸に^掬と^め
川^水 井^鈴 教^川 水
井 水 教 川 水

吹風よ嘆はゆき〜細代吉川
時を〜〜四方より深出に井
鏡を問〜〜眺は之鈴
京を〜〜細肩川
大鵬乃福揃く長廊下
酒醒の夕〜戸なり止井
糸の味え〜月此清スミそる教
伽二三〜人〜秋情鈴

ほろと若くぬ〜程少〜川
志ら〜情癒乃傍り世云水
鏡の風定〜も教と神身鈴
舞歎め〜〜銀のま家教
花の山ま〜八様〜常不返井
あつ何事〜〜に潜ふ石亀筆

懐春用

名竹や十三年七法の節 方紫
ぬふら城院はそらり又らる 堇帯
十三のちの種も早し五月雨 才婆
灰かろや標の指も折條を 詔武

悼原田汝篁君二決年忌辰

又る雨や十三年乃溜る家し 花雷
仰る古渾ちつと又らるる 亀洞

名々の種はぬふ八日の音響浦小 一穂

汝篁のハ家先門をくくく
あまうくくまひて今も十三回
ふもあはれとてやはあはれむむ
一向のよめをばして一竹全をいおる

家も於の末持をや子向州 女井
向小孫も人きむうや花うら 乙栗
又らるるや青も穂のたむお 北箕

懐春用

そ人汝篁の古ふら中匣の

うらぶらぶら玉場一おこそ
十三回忘るる水い

梅雨のちもひつげハ近一筆の蟲 蟻同
高蒲ゆく定持れよりハ法の明 管之
河汝管もそ一年も喚志やうぬ 一管

昨年一祝友汝管十三回忘
け人陽も春もも持り

け心陽もていさやま向守苗局者 周山
云の暮業とつら移く若ゆぬ移く 夏岡

管まふうま返歌ハ冊子要録
とくして流流探まらんじ

ふく思ふ若ハ交柳乃紅紫も 朶輝

ゆまろまを又由一くりとみ
孫よんんんんんんんんんんん
志てのらゆや財志くねと結成
せーも十一と年一

ふ向んとも流りれ方や雲の峰 古州

清くそ山日敷や梅るれ雨の泡 布門

懐蕨の

後四行と名ハ昔り一電入る 外舟

右も夜而や五月八日の雨の降 降苗

懐舊雨

海苔の二周を心地のよきもの
くらやうと平年の茂林より

云はるも海つるもやうと月川 紫柄
何天ぞしと年ちうと雲のけん 花輔

懐舊雨

世はちの木の向は清く交れり 卯重
みくぬれ月毛の駒よ梅を紅 虫磨

二ひうー間へい香もあつた花の君 松群

十二支の行儀やそぬの忘れ科 天玉 直流

今とつよれくく麻や峰のを 魚夫

雅社のまじり
家より

竹るの後又せうー雲見草 知流

軒ハ跡と色いぬ日救や杜宇 杜花

懐舊雨

昔ハ平凡社の友よりてを佐者なり
なう極名月子雨を飛たるなり

こゝに居るうねりうねり—ハ底の志は深き
人先感ず—七蓮のむら—と遊んで又
十三日の雲を—竹舎主人の程せう
り—上又文又—志を結—
君あよ供へあ—んと

香を焼く妙子 畑ちんおとりの石 殿尺

和田氏のまを—回と信—
梓日鑑より—竹舎のまを—

月てるふや 実秋おとりの葉の茂 舎鳳
草を叶 吟やむ—と水北影 九席

懐舊篇

休極—以—のうさ—林夕名人 峯唯

夢の音をきかば—— 露の云 雨樂
魚の山とも白しや 増ふ雲見叶 秀魁
り石をうつや 音よあつらふ車—百合 疎考
云北葉の輝—よ—は—何—あ—る— 之只
も向くや五あ—匠塚の音のふ 友松

懐舊篇

ふの座れ法の阿多—や—電—尺叶 馬紅
十三年—つ—き—男—れ—石—ふ—か 笛道

七君汝多まよハ平と莫逆のあまき
七君忘ままよハ平ハ今頼むや年月
移くまよハ平の句と一竹舎まよ
送まよハ平ハ汝ハ平幸終命
あまき懐胎まよハ幸まよ
免まよハ平らりや

風雨系 松よ海のや十三卒 標山

懐胎雨

故人母多まよの統及の
かくりまよハ平まよハ平

楊柳 十三卒 自れまよハ平 青紙
秀まよハ平ハ平まよハ平 及瓜

懐胎雨

又まよハ平まよハ平のハ平のまよ 是中
石まよハ平のあまきまよハ平のまよ 千立

懐胎雨

又まよハ平まよハ平のハ平のまよ 丸子
十まよハ平まよハ平のまよハ平のまよ 夕哉
かまよハ平まよハ平のまよハ平のまよ 港芦
まよハ平まよハ平のまよハ平のまよ 東々

一むうー新神中又日月雨 竹庭
十三の峠をかくるふ河あり 貞紫

母子河たけみ御安まをさるる
面をかく物事しとありいあり

さるあのみ月を啼く九尾の狐 巴水

懐舊

汝昔の事を忘るる初六迄先舗

さるけいへくもよむうーの標陰 折井

舟子を遠くし事えぬそよ向夜あり 戸羽子

香をそとくふふたらを水や神の雨 可教

歌仙

あけの清い露に三井の鐘 里川

簾よもたの目志はは娘葉 晚鈴

さよふくと連る風を舟に吹く 巴水

野なみーびぶる釣合 川

遠合の畦を走り小月の照
る海もあはれとみろよいな
押の空も小流もさけは松の店
登りよまた古作松の八重垣
懐の又も揺るもいし又太刀
大折も持ちく尻の志知り
稲石小那須野の系へ飛ては
坂を志ざりくお雨の懸
川 水 鈴 川 水 鈴 川 水 鈴

鳥帽子より外は細合ぬるさし
とやうも物まきのつねは利
一門は御てふよはを敬し
捨ちよ薬考の何らもを喚
神業て顔の朧も月の又
そとかくたよは皆負御並
風よ涙もいよはあはれ織子
梶とこ南もよは山草の題
川 水 鈴 川 水 鈴 川 水 鈴

川 入のあつた
川 海の小きく空に橋
川 伐採の額乃れはまおら
川 小橋もまよふ心
川 奈てもアヤとさく
川 使らうとく黄柳
川 似傳のまぶたは
川 ことの秋を
川 鈴

水 その文の淵は
水 隈の川くき
水 垣一をあら
水 呵りさ
水 噴まは力
水 穢よま
水 陰
水 只今を
水 筆

他部之部

懐篇

福原

折柳水涼しく曇るふ新井 梅史

云のまふは薄紅と寂し墳の公口 岡山 杖

石の今もまた櫛乃白ふの如 河内今津 久

恩を報の一廿金へ送る

新免

あふふれ路をくらえふあ茶外 巨幡

懐篇

又うゝ所の晴るるを吸てふ向ふ 有馬 如扇

惟神をくく侍るる立花 全 渦兄

一むりくくくくくくくくくく 全 可樂

懐篇

國方

あふふくくくくくくくくくく 素 一笑

ふ向ともねむるや一葉白のみ内 全 一水

右いねふと昔夕夕日や朝霧 桑津 旋之

そく折のうを晴るるくくくく 天王寺 龍吟

懐舊雨

こころの世の仏子
花事とくまの心

河州紀事

漏るる水の中や昔年の雨やを軒 八千春

流るる水の中や昔年の雨やを軒 朽章

流るる水の中や昔年の雨やを軒 亀鏡

日伊賀の邑

懐舊雨

泉州佐野

又るる水の中や昔年の雨やを軒 戶外

又るる水の中や昔年の雨やを軒 一知

懐舊雨

淡路福良

泥牛改

身はるる水の中や今乃御焼香 虎洞

五月雨や晴るる水の中や 松牛

日小椋並

昔ともなごめや原田小そけ早苗 春雄

日福永権春改

尋るる水の中や 乙貫

日小椋並

恩を忘るる水の中や 夏竹

日西

懐舊雨

洛

大津松の功績の文を乃御の如 羅維人

五月八日きき原田汝管を子
年回のうら—暖後子より
若きうら—たあふも唐皇
をととのくともて

熊野新宮

中や傳ツテ法よ阿あちれふ咲日 良道

懐舊的

春を食す—後も来とせおほひる 潘山
一む—一寐えちり—朝春も 樊川
石の香ハ春のあち—や翠月晴 藤角
微ぬり石や又月も毎も一む— 楮同

る人よ阿あひう—や塚の陰 岳天

懐心へ—熊野の
こま うら—

草の花十三重を多文の峰 文麟
一免くうら—一時斗の花車 千鹿

懐舊的

ゆり—やによの田長れは圃の香 了雨
付よ花や教々か—ととれま 素見

懐舊的

風流志一の種不幸
終年を吊りぬ

去りて十三年もや梅さる雨 菊霞

系田氏の十二回みゆりて
晩浴れ吊りてこと悲し
いさく一松の香子久縹ぬ

郭公女の如く皇作の貴相忌 耳交

彫刻 心寄格瓦所更
藤村加平次

